



フクシマの視点

[日経ビジネス オンライントップ](#) > [IT・技術](#) > [フクシマの視点](#)

足湯が溶かした2500人の張り裂ける思い

巨大避難所で暮らした名もなき人々のつぶやきと表情を出版

2011年10月5日 水曜日 藍原 寛子

避難所で暮らす80代の女性がつぶやいた。

3か月で自宅に2、3回しか帰れず、
自宅が恋しい。
仮設住宅も抽選でまだ入れない。
人生すべて一からで、これからが一番大切だから。

60代の男性は「あの日」を振り返る。

震災の日、
護岸で仕事をしていたら、
大きな波が来たのがわかった。
あと30分いたら巻き込まれていたかとも思う。
仮設はまだ決まってないけど、
ここにいさせてもらえているだけでありがたいから、
居られるだけいたい。
生きているだけで十分だと思う。

(ここまで『生きている 生きていく ビッグパレットふくしま避難所記』より、許可を得て転載。以下同)

東京電力福島第一原発事故後の3月16日、富岡町や川内村など浜通りの住民が緊急避難し、最多で2500人もの人々が生活を送った中通り・郡山市のコンベンション施設「ビッグパレットふくしま」。開設直後は通路が人であふれる状態だったが、仮設住宅への入居が進むにつれて人数も減り、開設から約5カ月半の8月31日に閉鎖された。



ビッグパレットふくしまの避難所閉所式＝8月31日、郡山市(写真:藍原寛子、以下同)

この施設で避難生活を送った人々のつぶやきと、表情をとらえた写真による記録集『[生きている生きていく ビッグパレットふくしま避難所記](#)』(アム・プロモーション)が10月3日発売された。

物流、直接製造コストを除いた販売収益は、富岡町と川内村の災害対策本部に寄付される。

赤地にタイトルをシンプルに書いた表紙。この記録集は、ある“特命”を受けた1人の福島県職員の思いから誕生した。

1人の県職員に突然の“特命”下る

その人は、福島県スポーツ局生涯学習課の社会教育主事、天野和彦さん。震災後、同僚と2人1組で相馬市の避難所を回っていた天野さんは、もうじき震災から1カ月を迎えようとしていた4月9日、突然、県の災害対策本部に呼ばれ、内示を受ける。

「ビッグパレットふくしまの避難所に常勤してほしい」

「はい、分かりました」と天野さんが答えると、「本当に良いの。じゃ、1日ゆっくり休んでもらって。(4月)11日に着任してください」

何か変だなと思いつつ、11日に着任した。

実はこの時、ビッグパレットふくしまは危機的状況に陥っていた。「福島こどもの未来映画祭」や、生涯学習や男女共同参画関連のイベントなど、県職員の中でも様々な事業に携わり、県内外の人と豊富なネットワークを持つ“異色の県職員”天野さんに、現状打開の白羽の矢が立てられたのだった。

「まさに、我が目を疑う状態でした」。避難所に着任して驚いた。生活環境は劣悪だった。

コンベンションホールの広いフロアは天井板が落ちて危険な状態で、4階も壊滅的被害を受けていた。そのために避難者は、施設の通路や階段ホールなど限られた場所にスペースを確保し、固いコンクリートの上に毛布を2、3枚重ねて敷いて身を横たえていた。

エレベーターは使えないため、高齢者や体の不自由な人が上の階にいたり、トイレの前も居住スペースになっていたり、避難者の状況や衛生面への配慮もされていない。既に体調を崩す人も出始めており、4月10日にはノロウイルスの疑いの患者が発生。感染性胃腸炎も起きており、これ以上の集団感染は防がねばならなかった。

「このままでは誰かが死ぬ。誰も死なせてはならない」

富岡町、川内村の職員の間にも危機感が漂っていた。

足湯が溶かした2500人の張り裂ける思い:NBonline(日経ビジネス オンライン)

ところが天野さんの着任の日にも大きな問題が起きた。打ち合わせの最中に起きた震度5強の大きな余震。急きょ職員で入所者の安否確認が始まった。天野さんが両町村の職員に、「そういえば避難経路図はどうなっていますか。避難経路図を出して。それから避難者名簿と、避難者の居住フロア図も」。そう尋ねると、富岡、川内両町村の災害対策本部の職員からは、驚く答えが返ってきた。

「避難経路図…、まだできていません」

「入所者の名簿もあるにはありますが、出入り自由で必ずしも正確ではないんです」

「震災からもう1カ月が過ぎているのに、いったい、何をやってたの」。天野さんはそう言おうとして、男性職員の顔を見た瞬間、あっと言葉を失ってしまった。男性職員の目は落ちくぼみ、うつろだった。ひげはぼうぼう、髪もボサボサ…。憤りの代わりに、天野さんの口からは違った言葉が出ていた。

「みなさん、ちゃんと休んでますか」

「4日出勤したら、次の1日は休むことになっていますが…、でも…、休んでません」

住民らは疲れ切って、身を横たえるだけ

それもそのはず、富岡町、川内村の住民は、避難所を求めて県内を転々としていた。富岡町が原発の異常を受けて川内村に受け入れを要請して一時避難したのが12日。ところが14日、15日と爆発が続き、16日には両町村の住民が一緒に避難を開始した。近隣の市や町への避難を試みたが、大勢の受け入れはできないと言われ、ようやくたどり着いたのが郡山市のビッグパレットふくしまだった。

到着した時、両町村の住民らは疲れ切って、身を横たえるだけだったという。みんなが「着の身着のまま」の避難。男性職員も、身なりを構う暇もなく住民支援に当たってきた避難者の1人だった。

事故当時の川内村の人口は約3000人。その川内村の人口の3分の2に相当する2000人が、同じ施設で避難生活を送ることになった。お年寄りには日中もぐったりと体を横たえている。若い人は携帯電話やゲームをいじっている。時間がくると食事の配給の列に並ぶぐらいで、どんよりとした空気が漂う。避難者の出入りも多く、小さなトラブルや苦情もあった。

避難所の運営は市町村の役割だが、マンパワーに限られた町や村の役場職員だけでは到底、手に負える状況ではなかった。避難者は“第2の危機”を迎えていた。

「分かりました。では私たちがやりましょう」

天野さんら支援に入った県職員は救護班と連携し、さっそくフロアにいる人、一人ひとりの確認と避難者名簿作りに入った。健康保険の内容、要介護者か、単身か家族か、高齢者か、障がい者か、DV被害者はいるのかなど、2000人の情報を聞き取りで収集して、10日かかって名簿を作り上げた。同時に避難経路の確認も行った。

さらに最大の懸案だった感染性胃腸炎とノロウイルスの集団感染予防に向け、感染者には「健康観察室」に入ってもらって、ほかの人とは離して治療をしたほか、トイレ前や水飲み場、暗い場所など、衛生面で問題がありそうな場所には、居住スペースを置かないなどの対応を取った。

雨も降ったし、
家壊れたし、
もう家はダメだね。
3日で帰れると思ったのにね。
顔は笑っているけれども、心では泣いているんだよ。
こんな辛いめはもう私たちでこりごりだよ。

(60代・女性)

被災地で受け継がれた「足湯」が避難者の心を開いた

その数日後、新潟県から社団法人中越防災安全推進機構理事・復興デザインセンターの稲垣文彦さんが応援で駆け付けた。震災支援を多数経験している稲垣さんに、天野さんは相談した。

「稲垣さん、命を守るっていうのは何とかできそうだよ。でも自治はどうやればいいの」。阪神・淡路大震災の際、仮設住宅で起きた孤独死などの問題は、住民の交流と自治が保証されなかったためではないか——、との思いが天野さんの頭にあった。仮設住宅に移行した後も、活発な自治と交流が続くための助走や準備段階としての避難所運営はどうしたらいいのだろうか、と。

すると、経験豊富な稲垣さんは率直に答えた。

「分かりません。2000人以上が1カ月以上もこんな状態なんて、今までどこにもなかったから」。そして、「天野さん、私にも分かりません。分かりませんから、一緒にやってみましょうよ」。

天野さんは振り返る。「この言葉を聞いたとき、ああ、本当に信頼できるなと思いました。どうなるか誰もわからない大変な状況。でも一緒に頑張ってくれるんだ、と」。

話し合っていくうち、稲垣さんはある提案をした。「『足湯』と『サロン』は非常に良いと思うんだよ、心をほぐすのに。どうだろう」。

その時、天野さんの頭には「『足湯』って温泉にある共同足湯？ 寒いから心がほぐれるのかな」というぐらいしかイメージが湧かなかった。ところが、応援で間もなく駆け付けた同機構・地域防災力センターの足湯コーディネーターで社会福祉士の北村育美さんらの説明を聞いて、即、足湯サービスのスタートを決定した。



ボランティアから足湯サービスを受ける避難者
(左)=6月

足湯が溶かした2500人の張り裂ける思い:NBonline(日経ビジネス オンライン)

足湯サービスとは、マッサージと傾聴ボランティアのこと。阪神・淡路大震災で鍼灸師のインターンがボランティアで避難所を回って足湯サービスをしたことから始まり、その後の大きな震災でも、大学生らボランティアの間で活動が受け継がれ、東日本大震災でも行われた。

湯をはった桶に被災者が足をつけ、ボランティアが手や肩、手首にかけて優しくマッサージする。体が温まると、自然に心も開放され、被災者は自分の言葉で話し始める。ボランティアは無理に聞き出すことをせず、ただ被災者の言葉に耳を傾け、受け止める。

「おじさんはどちらからですか」。

「オレがい？ オレは、富岡がらだ」。

「富岡っていえば、桜がきれいですよね」。

「んだな、桜ってのはよ…」。

避難所の一角で足湯サービスが始まると、そんな会話が積み重ねられていた。

ボランティアはサービスが終わると、被災者に分からないようにその言葉をカードに書き留めた。これが被災者の「つぶやきカード」。今後の被災者支援や避難所運営に活用することを目的としている。つぶやきの中には、おおっぴらには言えない悩みや避難生活での困難、要望などが含まれていることがある。そうした声を汲み取り、役立てていく狙いがある。

つぶやきカードは連休中で100枚以上に

連休中に都内の学生や市民など県外のボランティアが駆け付けて、足湯サービスをしてくれたおかげで、つぶやきカードは連休中だけで100枚以上に上った。ようやく時間ができたある時、天野さんはその内容に目を通した。避難所のおじいちゃん、おばあちゃんの声。情景。

「もう2ページ目から読めなくなっちゃって。これはもう、1人っきりになる場所で向き合う必要があるって」。天野さんは、場所を移して、すべてのつぶやきをじっくりと読んだ。読み終えた後、天野さんの目に、たった1人で食事の前、弁当に手を合わせているおばあちゃんの姿が飛び込んできた。避難生活を送る人々が今、ここで懸命に生きている姿があった。避難所の風景や空気は、今までと全く違った情景として天野さんの前に広がっていた。もう涙が止まらなかった。

「もっと避難所を良くしたい。この環境は人権問題だ」。

同時に「避難所で暮らす人々の言葉を世に出す必要がある。あの姿を写真に残す必要がある。そしてあのおばあちゃんの姿を、商業写真家の人にちゃんと撮影してもらいたって。真実を伝える時には、テクニックも必要だと思ったから」。そう話す天野さんの目から、熱い涙があふれ出した。

ごはんぽろぽろこぼれる。

夜にシクシク泣いている人もいるんだよ。

漁師やってたんだけど、船が全部ひっくり返っちゃった。

どこから来たの？

遠いところからありがとう。

(足湯は)本当に気持ちいいな。

(70代・男性)

支援者にとって「寄り添うこと」とは

「その時もう、はっきり分かったのは、震災や原発事故っていうのは、大熊町とか浪江町とかで起きたのではなくて、それぞれの町に住んでいた普通の人々の生活の上で起きたんだってこと。『太平洋沿岸で災害が起きました』とニュースは伝えるけれど、それ以上に、もっとリアルなことなんだと」。

被災者のつぶやきには、東電や国や県への不満もちろんあったが、一般生活者の視点から見た被災はまた違っていた。



記録集を手に「寄り添うことの意味を知った」と話す天野さん

「『ふるさと』っていう言葉がある。自分が通っていた小学校があって、そこまでの道のり。通学路の途中にあったあの駄菓子屋。そこに10円持っていけば、おばちゃんがあめ玉を1個くれたっけ。中学校に通ったあの道。校門を出た時、初恋の人に初めて告白したあの場所。一人ひとりにふるさどがあって、その思い出の場所があるって。今回の震災は、その場所に入れなくてことだって。ふるさどがなくなっちゃうかもしれないって。自分だったら、どうなんだよって」

天野さんは言う。「言葉にしちゃうと薄っぺらくなるけれども、『寄り添う』って言葉の意味が、自分のなかで現実になって迫ってきた。被災するって、現実はこういうことなんだ、と」。

資料として、教訓として、多くの人々に「避難所はこういうところだ」ということを知って、忘れないでほしい。震災から半年が過ぎて、世の中には一段落したような雰囲気は漂っているけれども、フクシマの被災者である我々は、単にそれを憂うのではなくて、外に向けて発信していかなければならない、と。

振り返って、
良かったと思える人生にしなくてはいけないよ。
退職するまでいろいろあったけど、
いい人生だったって、
かみさんと言ってるんだ。

(60代・男性)

足湯が溶かした2500人の張り裂ける思い:NBonline(日経ビジネス オンライン)

天野さんのこうした想いを受けて刊行委員会が発足。足湯ボランティアが書き留めたつづやき約1600編の中から、個人を特定できないような約150編を選んだ。印刷所と出版社は地元企業のシーアイエー、アム・プロダクションに依頼。両社は「田舎の印刷会社に何ができっか、わがねえげど、手伝わねえかなんねえべ(田舎の印刷会社に何ができるか分からないけれど、手伝わなければならぬでしょう)」と快諾した。

歌人の俵万智さん、詩人の和合亮一さんも協力

写真撮影は、天野さんの友人で、地元の写真家野口勝宏さん(日本広告写真家協会会員、スタジオオーツ代表取締役)が行った。野口さんも震災で郡山市のスタジオが大きく損壊、深く落ち込んでいた。仕事も止まってしまい、「仕方がない。せつかく時間があるのだから、今までやりたいと思ってできなかったことをやろう」と、好きなカメラで花ばかり撮っていた。

「花は特別な力があるようで、落ち込んでいた気持ちも不思議に前向きになれました」という。そんな時、天野さんから、記録集の写真の話を受けた。野口さんは1も2もなく、引き受け、時間ができればビッグパレットふくしまに立ち寄った。それはほぼ毎日だった。

月命日に、亡くなった人を思い、手を合わせる人々。
薄暗いビッグパレットの階段で、配られた弁当を食べる子どもたち。
配給物資を手「こんにちは」と笑顔であいさつする女性たち。
避難区域に一時帰宅した際、道に出てきた茶色のやせた犬。

一時帰宅っていてもねえ、
何持ってくれば良いんかしら。
通帳っていてももうこっちで作っちゃったし、印鑑もよねえ。
お位牌たって、数個もあつたらあつたで重いし、かさばるでしょ。
アルバムたって重いから、容易じゃないわよ。

(60代・女性)

避難生活を送る人々が見てきた日常がありのままに記録されている。

刊行委員会は、中原中也賞や晩翠賞受賞者で、福島市在住の詩人和合亮一さんにも協力を求めた。和合さんも趣旨に賛同し、書き下ろしを含めて5編の詩を寄せた。和合さんも震災当時ツイッターで思いを発信、詩集「[詩の礫\(つぶて\)](#)」が話題に。記録集のタイトル「生きている 生きていく」は、和合さんの詩の中からとった。

和合さんは言う。

「震災が起きた時、私は『福島は終わりだ』と思いました。そして、誰に読んでもらうのでもなく詩をつづっていました。避難していた方々の声も、誰に読んでもらおうというのでもなくつづやいた言葉で、とても共感できます。今、震災から半年が経ち、日本全体が沈静化しつつある中で、今後はこうした小さなつづやきを、まるで箱に入れたメッセージのように、一人ひとりに手渡していくことが必要なのではないのでしょうか。本になってみなさんの手元に届けられることは、全国の人、そして福島の人にとっても大きな力になるはず」

震災で助かって「ああ、生きている」と実感する。同時に、「ああ、これからも生きていくんだ」という決意。フクシマの人々の思いが本のタイトルに込められている。

足湯が溶かした2500人の張り裂ける思い: NOnline(日経ビジネス オンライン)

推薦文は、以前に天野さんが和合さんを通じて仕事をしたことのある歌人の俵万智さんに依頼した。すると俵さんは「そういうことでしたら、書かせていただきます」と、二つ返事でOKを出した。出版に向けて大きな弾みになった。

喫茶コーナー、そしてミニFM局

天野さん、稲垣さん、そして富岡町、川内村の職員はその後、一緒に活動する中で信頼関係を築き上げ、次々に避難者の意見を反映させたり、避難者自身が運営に関われるような仕組みを作っていた。

4月17日、「着替える場所がない」という女性の声を受けて、女性の専用スペースを作った。

4月18日には、誰でも気軽に立ち寄って無料でお茶が飲める「サロン」をオープン。この日、北村さんらスタッフが救援物資からコーヒーやお茶を探し出して準備を始めたが、物資の中にインスタントコーヒーはなく、あったのはドリップのレギュラーコーヒー。「どうやって入れるの」などと、もたもたしていると、1人の男性が無言でスッと現れ、手際良くコーヒーを入れ始めた。それまで体臭やほこりのおいが充満していたフロアーに、ふんわりとコーヒーのおいしい香りが漂い始めた。

「いい匂いだな」

「なんだい、なんだい、コーヒーごちそうしてくれんのかい」

香りにつられるように、コーヒーを求める人が次々に居住スペースから出てきた。「この味は一生忘れられないなあ」。そういつてしみじみ味わうおじいさんの姿もあった。

この時、黙っておいしいコーヒーを入れてくれた男性は、震災前に喫茶店を経営していた人だった。後に避難所の人たちから「マスター」の愛称で呼ばれるようになる。次第にマスターの手伝いをする人が現れて「偽マスター」と呼ばれるようになったり、花を持ってきてくれる人や、「こうやって大騒ぎして集まるから、汚れてしょうがないよ」と言いながらモップで掃除する人も。

人々が集まって助け合う中で、自然に「自治」が生まれていった。最初のサロン「さくら」は大好評で、次いで喫茶コーナー「つつじ」「つくし」と、ついに3号店までオープンした。

5月1日には、富岡町と川内村の社会福祉協議会による生活ボランティアセンター「おだがいさまセンター」が開所。「お互い様」が福島弁でなまって「おだがいさま」。しゃれた横文字でも、かしこまった行政用語でもないネーミングは避難者からも好評だった。やがて連日、県外からのボランティアがビッグパレットふくしまに次々と駆けつけるようになり、多彩な活動が行われていった。

5月11日には避難者自身が参加するボランティア活動も開かれた。避難者を対象に、ビッグパレット周辺の草むしりをする「草むしり隊」を募集したところ、「20~30人も来たらいい」との事務局の予想を大きく上回る250人もが集まった。手ぬぐいで頬かむりしたおじいちゃんやおばあちゃん、若い人も次々にやってきて、ワイワイにぎやかな中で作業が進められた。

ボランティアの皆さんに謝りたいと思ってて。
みんな何かイライラしてて、中には自分の怒りを、
関係ないボランティアの皆さんにぶつけて
怒鳴ったりしている人もいるみたいだけど、
まあ、田舎の人なもんで、
人の付き合い方がよく分からないから八つ当たりしてるけど、
許してくださいね。
今回ひとつだけいいことがあって。

それは今回のことで、東京の人に「東京の電気は福島で作っている」ってことを気づいてもらえたことだ。

(50代・男性)

5月27日には、避難所内にミニFMラジオ局「おだがいさまFM」が開局。避難者も、町村役場の職員も、ボランティアの人たちも、パーソナリティやゲスト役を担当して、音楽やバラエティ情報を提供し続けた。

聞きたい曲があるの。
でも、リクエストできない。
泣いちゃう。
亡くなった息子がいて、その子が好きだったの。
巨人の星のテーマ。
その子の思い出も何もないの。
写真も新品のスーツも。
探そうにも20キロ圏内だから、もう戻れない。

(70代・女性)

「最初にビッグパレットに来た時、みんなが無気力に見えたのは、将来の展望がなかったというものもあったけれども、活動する場がなかったことが大きかった。場ができれば、みんな関わるようになって、それぞれの役割も自然にできた。それを組織的、体系的にとらえ続けることが大事なんだと分かった」と天野さん。「前から、行政職員には想像力が必要だと思っていたけれど、この時ほど想像力が必要だと思ったことはなかった」と振り返る。

今後の課題 仮設住宅の避難者支援

最初に比べたら今は全然いないと同じだ。
足の踏み場もないくらい
ぎっしりだったんだから。
……みんな行っちゃうんだ。

(70代・男性)

震災直後の大変な時期を、ともにビッグパレットふくしまの避難所で過ごした約2500人の人々は、現在、県内外の民間借り上げ住宅や県内の仮設住宅、親族の家、また避難区域の解除で自宅に戻るなど、それぞれがそれぞれの場所で次の生活に向けて歩き出している。

避難所で好評だった「足湯サービス」。地元福島県内の大学生や専門学校生のボランティアが「FUKUSHIMA 足湯隊」を結成し、避難所で培ったノウハウを生かして、今度は仮設住宅での活動を開始。仮設住宅で暮らす人々と触れ合いながら、その声に耳を傾けている。ボランティアの若者たちも、避難所での経験を生かして、自主的に次の活動を始めた。

この震災はいったい私たちにとって、どのような出来事だったのか。

「生きること」とは一体、どういうことなのだろうか。

そして、この震災を経験して、私たちはこれからどう生きていくのか。

名もなき人々が残した何気ないつづやきと、避難所の風景写真が、何度も何度も問いかけてくる。そしてこれからも、ずっと問いかけてくるに違いない。

[このコラムについて](#)

[フクシマの視点](#)

東日本大震災は、多数の人命を奪い、社会資本、自然環境を破壊したが、同時に市民社会、環境、教育、経済、政治や行政など、各分野に巨大なパラダイム・シフトを起こしている。我が国はどのような社会を志向していこうとしているのか。また志向していくべきなのか。「原発震災」で、社会の姿が大きく変わりつつある福島、震災のフロントラインで生きる人々の姿から、私たちの社会のありようをグローバル(グローバル+ローカル)な視点で考える。

[⇒ 記事一覧](#)

著者プロフィール

藍原 寛子(あいはら・ひろこ)



フリーランスの医療ジャーナリスト。福島県福島市生まれ。福島民友新聞社で取材記者兼デスクをした後、国会議員公設秘書を経て、現在、取材活動をしている。米国マイアミ大学メディカルスクール客員研究員として米国の移植医療を学んだ後、フィリピン大学哲学科客員研究員、アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所客員研究員として、フィリピンの臓器売買のブローカーシステムを調査した。現在は福島を拠点に、東日本大震災を取材、報道している。フルブライトナー、東京大学医療政策人材養成講座4期生、日本医学ジャーナリスト協会会員。

[日経BP社](#)

[日経ビジネス オンライン](#) [会員登録・メール配信](#) — [このサイトについて](#) — [お問い合わせ](#)

[日経BP社](#) [会社案内](#) — [個人情報保護方針/ネットにおける情報収集/個人情報の共同利用](#) — [著作権について](#) — [広告ガイド](#)

© 2006-2011 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.